

みせ かいてん はじ ていきゅうび よる
店を開店して初めての定休日の夜だった。店の
はなし お よそうがい きやく い ふたり かんぱい
話が終わり、予想外の客の入りに二人で乾杯し
たあと、志津のほうから源造の胸にすがっていつ
た。

はじめの志津に源造は限りなく優しく、たつぷ
りの時間をかけて身体を開いていった。女の
からだ し し つつ おとこ て
身体を知り尽くした男の手は、しなやかに動き、
しづ からだ むすめ おんな
志津の身体は娘から女へと導かれた。

男の胸がこんなにも広く、熱いものだとい
ことを志津は知らなかった。強い力で
抱きしめられるたびに、志津の身体は熱い吐息で
おお ぼわ
被われていく。源造の手に翻弄され、どこまでも
なが いしき なか はじ
流されていく意識の中で初めての儀式は終わった。

源造の妻芙美が志津のことに気付いていたか
どうかは分からない。二人の間で一度も芙美のこ
とを話題にしなかったように、源造と芙美の間
でも志津の名前は出なかったのではないだろうか。
げんぞう あい ひび しづ もっとしあわ
源造に愛された日々が、志津の最も幸せなと
きだった。

二十歳のママということが話題になり、店には
客が詰めかけてきた。志津は客の名前と好みを
一度で覚え、次にきたときにはさりげなく、好み
の酒つまみを用意する。その客は志津のきめ
こま さいくば
細かなサーブと心配りが氣にいつて続けて足
を運ぶようになる。カウンターの棚には常連客
のキープした洋酒がぎっしりと並び、その数はこ

それ以来、定休日の夜が二人の愛の時間になっ
た。

手塩にかけた一輪のつぼみがある日突然大輪
の花を咲かせるように、やがて志津にもその時が
訪れた。源造の身体の下で切ない叫び声を上げ、
なんど おお
何度も押し寄せる波に耐えかねて激しく体を震
わせた。源造はその志津を狂おしく抱きしめて、
せいねん あい しゅんかん とも つか
青年のような愛の瞬間を共に迎えた。

源造に妻がいることも、孫がいる年齢だとい
ことも志津には関係なかった。志津にとつて源造
は店のオーナーであり、恋人だった。そして、
おお あい つつ こ
大きな愛で包み込んでくれる父親のような存在
でもあった。

の吉祥寺でも一番と言われるようになった。
はたら はたら
働けば働くほど確実に収入は増えてくる。夜
の女としての自信と、源造に愛されているとい
う喜びが志津をより美しく変身させた。

愛らしくふくよかだった顔が引き締まり、大人
の女の顔になった。それでも微笑むと両頬に笑
くぼが浮かんで、年相応の可憐な顔が現れる。
うつく
美しくはあるが愛嬌もあるその不思議な表情
が、男には何とも言えない魅力になっている。

源造に見いだされてからほんの数年、志津は
源造の望み通りの女として見事に開花したのだ
った。
その志津に源造が別れ話を持ち出したのは、

源造が男として志津の身体を愛せなくなったと
きだった。これ以上志津を縛り付けておくことは
できない、まだ若いのだからこれから本当の幸
せを見つけて欲しいと言った。店の権利書を志津
の名前に書き替え、かなりの手切れ金を手渡され
たのもそのときだった。

志津は例え男と女の繋がりがなくなっても
源造と別れたくなかった。源造の胸にすがってそ
う叫びたかった。その気持ちを押し留めたのは、
別れ話をする源造の目に光るものを見たからだ
った。男の優しさの前で何も言うことはできな
かった。抱き合って過ごす最後の夜、志津は一晚
中源造の胸を熱い涙で濡らしていた。

がいても源造から逃れられない自分を知った。
源造の優しさが志津を縛る鎖になっている。解
くことのできない鎖なら、いっそ縛られたまま
でいよう。源造との思い出を心の糧としていき
ていこうと決心した。そうすることで、志津はよ
うやく立ち直ることができたのだった。

今、志津は吉祥寺で三軒のスナックと二軒の
割烹を経営している。人々は志津を吉祥寺の女
実業家と呼び、その手腕に羨望の眼差しを向ける。
女として、実業家として自信にあふれる志津の
顔だったが、その裏に隠された一人の男しか
愛せない女の悲しみを誰も知らない。

源造と別れてからの日々、志津はただ時の流れ
に身を任せるだけだった。悲しみに耐えるだけで
精いっぱい、とても先のことなど考えられない。
心の支えをなくした女は自分の身体を痛めつ
けるのも平気だった。何人の男とその場限りの
夜を過ごしたことだろう。酒の力を借りて志津
のほうから身体を投げ出したこともある。女盛り
の自分の身体が憎かった。

しかし、一時の激情が冷めてみれば、今度は虚
しさが心の中を駆け巡る。どの男も源造とは
違う。愛のない行為は身体を燃えさすこともでき
ず、深い傷痕だけを残した。

何度も同じことを繰り返したあとで、いくらも
志津の想いを知った夜、栄子はなかなか寝つく
ことができなかった。このあかつき荘の中に、こ
こで結ばれここで別れた源造と志津の想いが熱
く渦巻いている。二人の秘めた想いを抱きしめて
今も生き続けるあかつき荘を、栄子はとても
愛しいものに感じていた。

7

朝の目覚めの中に、冷たい空気が忍び込んでき
た。そして、秋から冬へと季節はゆつくりと流れ
ていった。

この数カ月の間に、栄子は少しずつ住人たちに
溶け込んできていた。お互いの生活に干渉し

ないという暗黙の了解 あつての付き合いである。それでも、栄子はあかつき荘の中によく自分の居場所を見つけたことが嬉しかった。

「すみません、お願いがあるんですけど」
十一号室の田口三枝子が管理人室のドアを叩いた。

十二月になつてすぐの土曜日である。曇り空のせいか日の暮れるのがいつそう早く、栄子は四時過ぎに廊下の明かりを付けて、早目の夕食の支度に取りかかろうとしていたところだった。
住人が用事で栄子を訪ねてきても、大抵は管理人室の小窓をはさんでの立話でことが足り

いが、自分を頼つてきてくれたことが嬉しくて、栄子は何でも聞いてあげようという気持ちになつていた。
「昼過ぎに健二さんといっしょに来たのですがお留守のようだったので……」

「ごめんなさい。幼稚園に直哉を迎えに行つたついでに買い物をしていだから遅くなつてしまつて」
直哉にせがまれてデパートにいき、そこで昼食を済ませてきたのだった。

紅茶のカップを手にしたまま、三枝子はなかなか用件を言い出さない。
「遠慮しないで何でも言つてちょうだい。住人

る。その時も栄子は小窓を開けて三枝子の次の言葉を待った。

「はい、何でしょうか」
「ちよつと中に入れてもらつていいですか」
三枝子の口調から、これは込み入った話になりそうだと直感した。

「どうぞ、中に入つて。紅茶でも入れるわね」
「すみません」

三枝子が座つた足元に電気ストーブをつけ、栄子は奥の部屋に戻つて紅茶を入れた。直哉はテレビのアニメ番組に夢中になっている。三十分は一人にしても大丈夫である。大学生の三枝子の頼みは何なのかまったく見当がつかな

の相談に乗るのも私の仕事なのよ」
栄子は励ますように三枝子の顔を覗き込んだ。
「実は、明日の夕方高知から母が出てくるんです。村木さんのところにも挨拶にくると思いますが、そのとき私が健二さんと暮らしていることを黙つていて欲しいんです」

三枝子の頼みはまったく思いがけないことだつた。これでは言いにくいはずだと栄子は思った。
ここにくるのも何日も二人で悩んだ末のことだろう。
しかし、随分勝手な話である。同棲生活をエ

ンジョイしているのなら、もつと堂々としていれ
ばいい。都合が悪くなると誰かが助けしてくれると

いう甘い考えに腹が立つてきた。

「牧原さんと一緒に住んでいることをご両親は知らないのね。私も一応母親だから、それを知ったときのお母さんのショックを思うと気の毒でたまらないわ」

「自分勝手なのは分かっています。でも、後半年足らずで卒業です。せめてそれまで母の夢を壊したくないんです」

三枝子は真剣な表情で食い下がってくる。

「何か事情がありそうね。それを聞かせてくれな
いかしら、あなたの頼みを引き受けるかどうかは
それから考えることにしますから」

栄子は自分でも意地悪な言い方をしていると

思った。しかし、高額な学費と生活費を仕送りしている親の身になってみると、三枝子の生活を許すことができなかった。

しばやくうなだれていた三枝子がきつと顔を上げた。

「事情をお話します。聞いてください」

三枝子の口調に強い決意が現れていた。

(以上12月9日放送分)